令和４年度 後期末 人間学部

授業評価アンケート調査、学修時間等に関する報告

はじめに

本報告書は、令和４年度後期に開講された科目の内、学生による授業評価が実施された 85 科目についてまとめたものである。授業評価の各項目の平均得点および「全体」の平均得点について検討した。また、担当者独自が個別に設定する質問項目の評価点については、各科目間で比較できないため、本報告書では扱わないこととする。

（１） 共通教養科目

回答のあった共通教養科目に関する授業評価点について、学科ごとにまとめたものが図１（心理学科 10 科目）、および図２（コミュニケーション学科９科目）である。図１に示された心理学科の学生の延べ人数は 337 名で、各学年それぞれ１年生＝188 名、２年＝132 名、３年＝14 名、４年＝3 名であった。また、図２に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は 224 名で、各学年それぞれ１年＝91 名、２年＝114 名、３年=10 名、４年＝9 名であった。

昨年度と比較すると、心理学科では、１年生と２年生について、いずれの項目においても昨年度を上回った。3 年生については、データ上、昨年度との比較ができなかった。コミュニケーション学科では、１年生については、いずれの項目においても昨年度とほぼ同様であり、２年生については、昨年度より上回った項目がほとんどであった。3 年生については、昨年度とほぼ同様である。

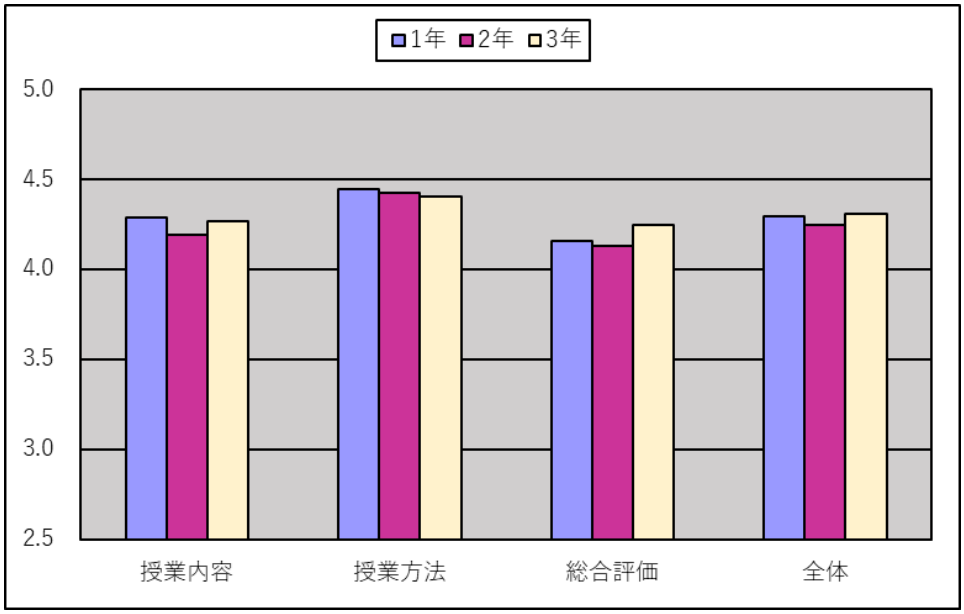

図１　心理学科：共通教養科目に対する回答値の学年別平均
延べ人数　１年＝188 名、２年＝132 名、３年＝14 名

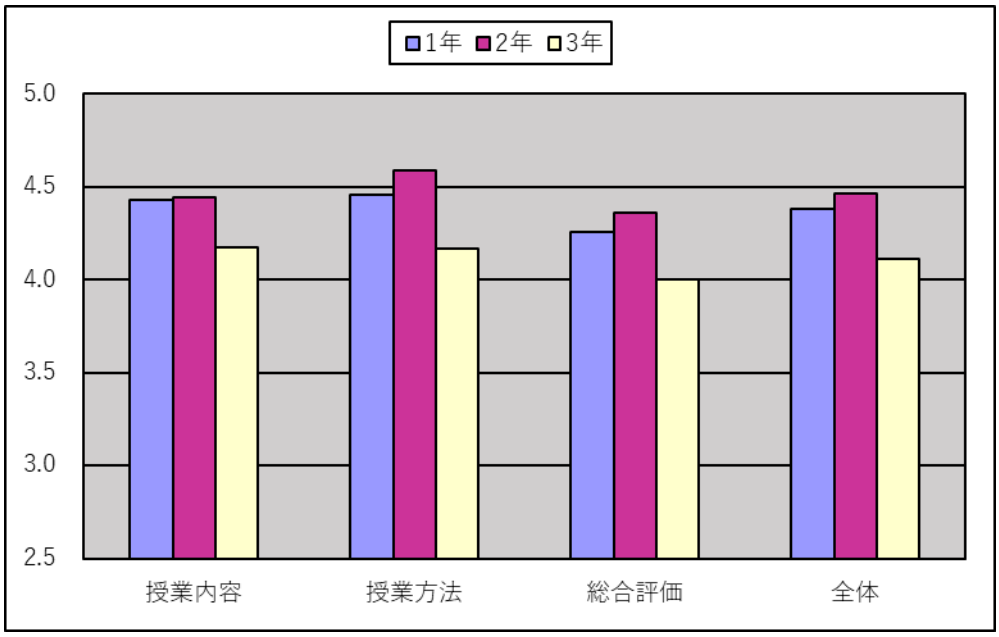

図２　コミュニケーション学科：共通教養科目に対する回答値の学年別平均
延べ人数　1 年＝91 名、2 年＝114 名、3 年=10 名

（２） 共通語学科目

回答のあった共通科目における語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ポルトガル語）の授業評価点について、学科ごとにまとめたものが図 3（心理学科 8 科目）、および図 4（コミュニケーション学科 8 科目）である。図 3 に示された心理学科の学生の延べ人数は 104 名で、各学年それぞれ 1 年＝90 名、2 年＝13 名、3 年＝1 名であった。また、図 4 に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は 83 名で、各学年それぞれ 1 年＝67 名、2 年＝13、3 年＝3 名であった。

昨年度と比較すると、心理学科では、1 年生については、いずれの項目においても昨年度を上回った一方で、2 年生については、いずれの項目においても昨年度を下回っていた。コミュニケーション学科では、1 年生と 2 年生ともにいずれの項目においても昨年度とほぼ同様であった。

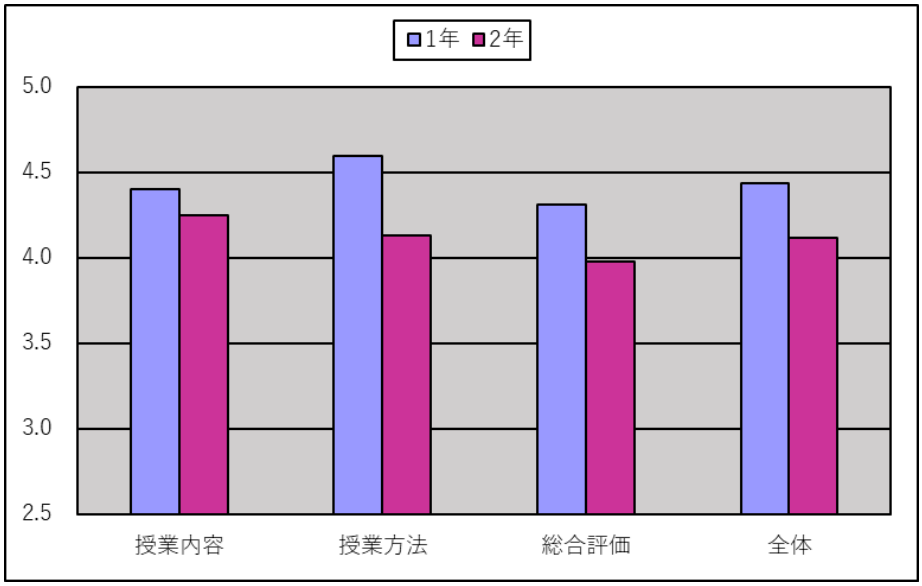

図３　心理学科：共通語学科目に対する回答値の学年別平均
延べ人数　1 年＝90 名、2 年＝13 名

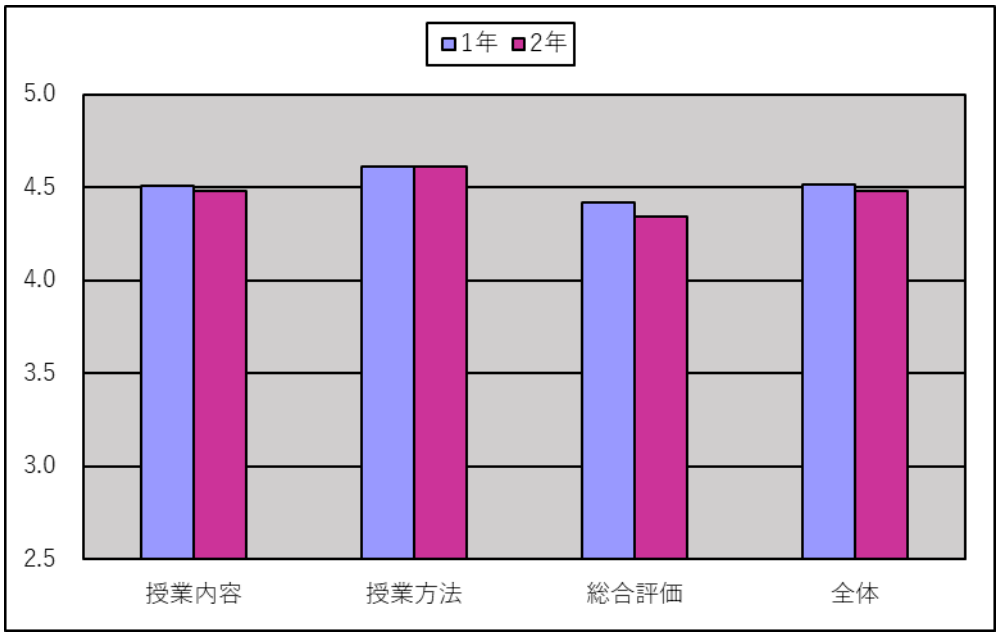

図４　コミュニケーション学科：共通語学科目に対する回答値の学年別平均
延べ人数　1 年＝67 名、2 年＝13 名

（３） 専門科目

各学科の専門科目（心理学科 19 科目、コミュニケーション学科 41 科目）の授業評価点について、学科ごとにまとめたものが図 5（心理学科）、および図 6（コミュニケーション学科）である。図 5 に示された心理学科の学生の延べ人数は 1,179 名で、各学年それぞれ 1 年＝404 名、2 年＝468 名、3 年＝291 名、4 年＝16 名であった。また、図 6 に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は 794 名で、各学年それぞれ 1 年＝364 名、2 年＝240 名、3 年＝160 名、4 年＝30 名であった。

昨年度と比較すると、心理学科では、1 年生、２年生、3 年生、４年生について、いずれの項目においても、昨年度とほぼ同様であった。コミュニケーション学科では、1 年生については、昨年度を下回った授業内容を除いて、昨年度とほぼ同様であり、2 年生、３年生については、いずれの項目も昨年度より下回った。4 年生については、データ上、昨年度との比較ができなかった。

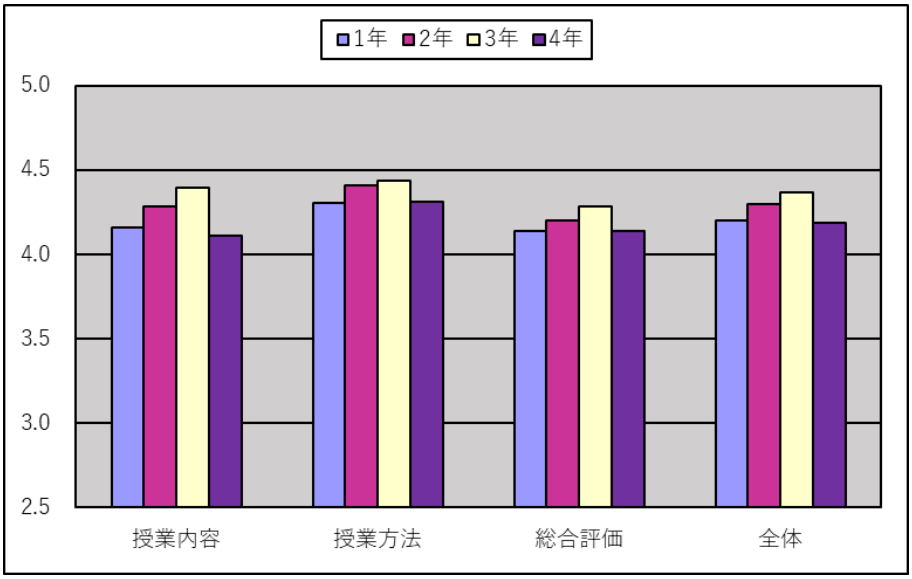

図５　心理学科：専門科目に対する回答値の学年別平均
延べ人数　1 年＝404 名、2 年＝468 名、3 年＝291 名、4 年＝16 名

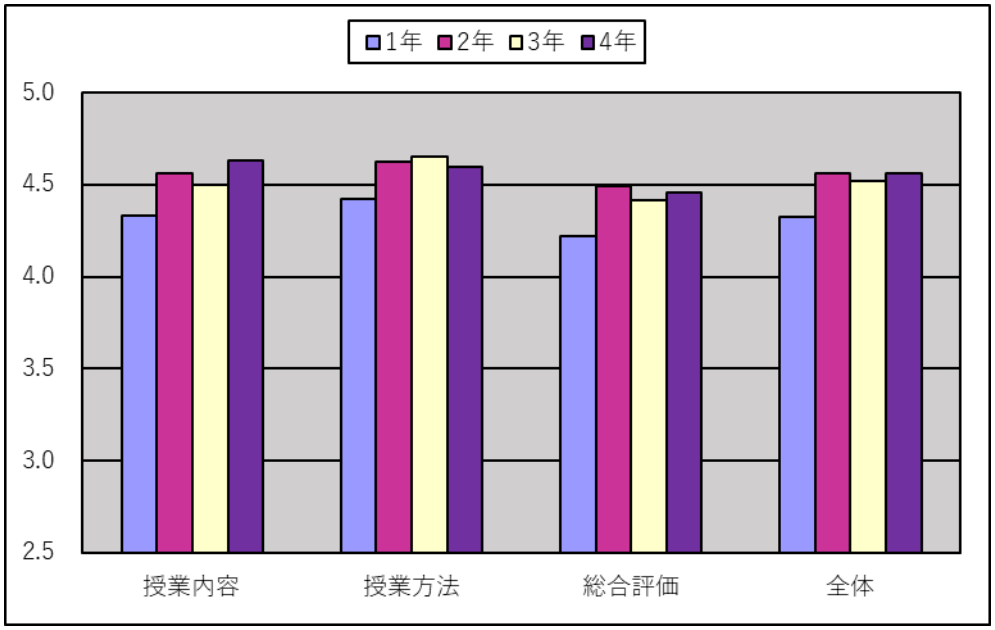

図６　コミュニケーション学科：専門科目に対する回答値の学年別平均
延べ人数　1 年＝364 名、2 年＝240 名、3 年＝160 名、4 年＝30 名

（4） 共通科目と専門科目の比較

ここから以降 7 節まで、科目の履修形態や、教室環境など、受講生の授業意欲、態度などに影響を与えると考えられる要因について、授業評価における評価点の平均値および標準偏差を指標とした比較検討を行った。本報告書で取り上げた具体的な要因は、科目の履修形態（共通科目と専門科目、必修科目と選択科目）、科目の履修者であった。本節以降の図の作成に利用した調査対象総科目数は 85 科目であったが、学部共通科目 10 科目は両学科の学生がほぼ半数ずつ履修しているため、学科別の評価点の平均値および標準偏差を求めた関係上、調査対象から除いた。

図 7 は履修形態ごと（共通科目と専門科目）の評価点を学科ごとに示したものである。分類した共通科目および専門科目の数は、心理学科ではそれぞれ 7、19 科目、コミュニケーション学科では、6、41 科目であった。昨年度と比較すると、心理学科では、共通科目においては授業内容、総合評価が昨年度を上回り、その他の項目ならびに専門科目においては昨年度とほぼ同様であった。一方、コミュニケーション学科では、共通科目ならびに専門科目において、総合評価が昨年度を下回り、その他全ての項目が昨年度とほぼ同様であった。

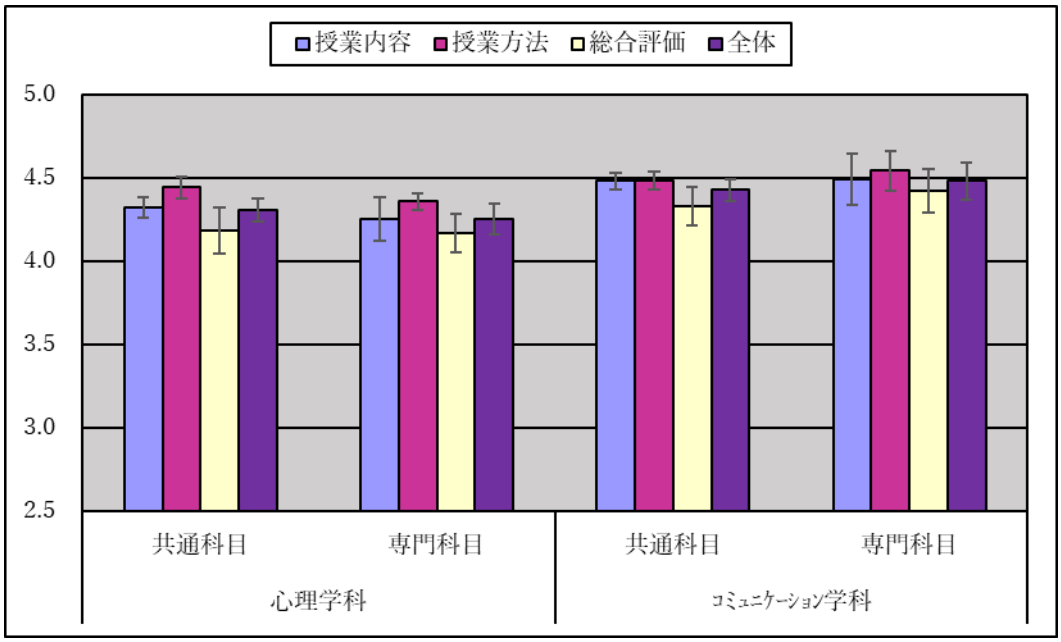

図７　共通科目と専門科目別の平均授業評価点（±SD）
共通科目と専門科目数は、心理学科で 7、19 科目、
コミュニケーション学科で 6、41 科目

（５） 必修科目と選択科目の比較

別の履修形態ごと（必修科目と選択科目）の評価点を学科ごとに示したものが図 8 である。分類した必修科目および選択科目の数は、心理学科ではそれぞれ 5、21 科目、コミュニケーション学科では、7、40 科目であった。今年度は、心理学科については必修科目と選択科目の評価はほぼ横並びであったが、コミュニケーション学科については、必修科目の授業方法が昨年度を下回っていた。その他の項目ならびに専門科目においては昨年度とほぼ同様であった。

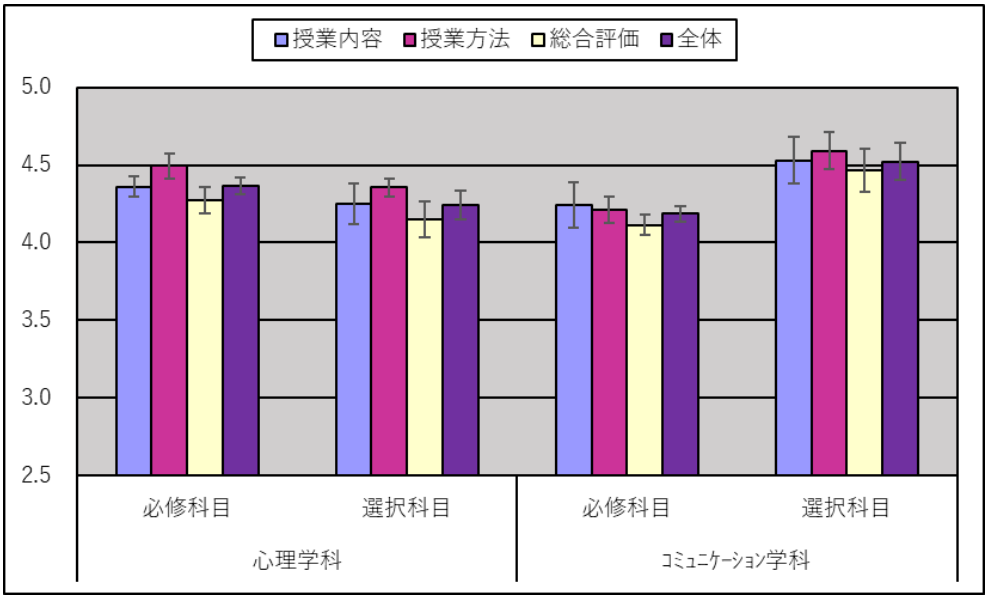

図８　必修科目と選択科目別の平均授業評価点（±SD）
必修科目と選択科目数は、心理学科で 5、21 科目、
コミュニケーション学科で 7、40 科目

科目の履修者数による比較

履修者数（履修者が 40 名未満の科目と 40 名以上の科目）で分類した科目別の評価点を学科ごとに示したものが図 9 である。なお、40 名未満の科目には、演習形式の授業も含まれている。

分類した履修者が 40 名未満の科目および 40 名以上の科目の数は、心理学科ではそれぞれ 5、21 科目、コミュニケーション学科では、37、10 科目であった。

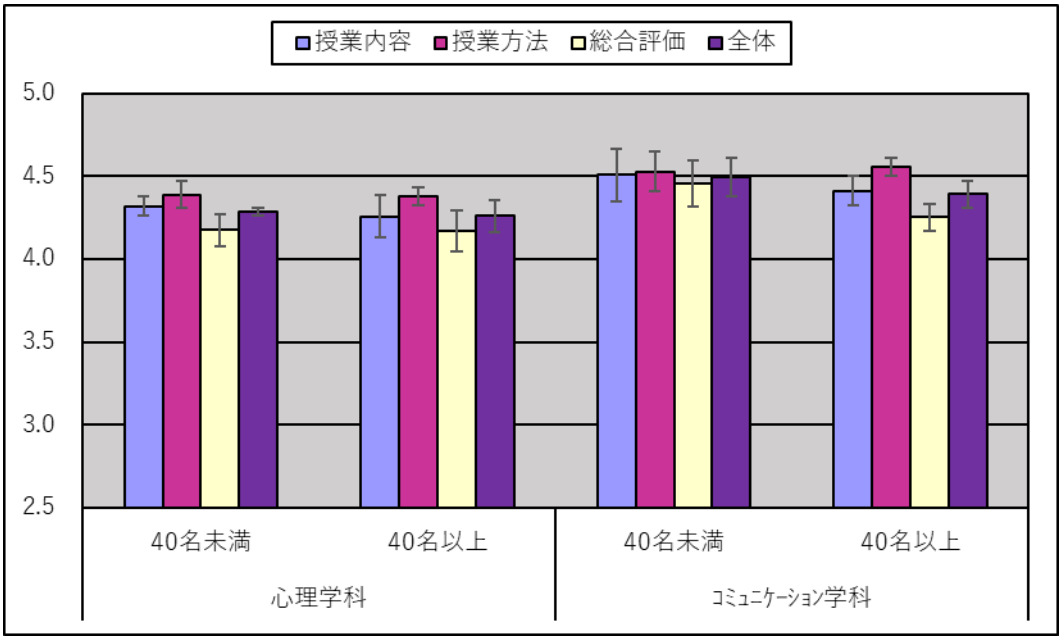

図 9　受講生数による各科目の平均授業評価点（±SD）
40 名未満、40 名以上の科目数は、心理学科で 5、21 科目、
コミュニケーション学科で 37、10 科目

続いて、各授業科目の履修者数と「全体」の評価点との関連について、学科ごとに散布図と相関係数で示したものが、図 10（心理学科）と図 11（コミュニケーション学科）である。心理学科では、履修者数と評価の高さの相関は見られなかった。一方、コミュニケーション学科では、弱い負の相関が見られ、履修者数が多いほど評価が低くなる傾向となった。

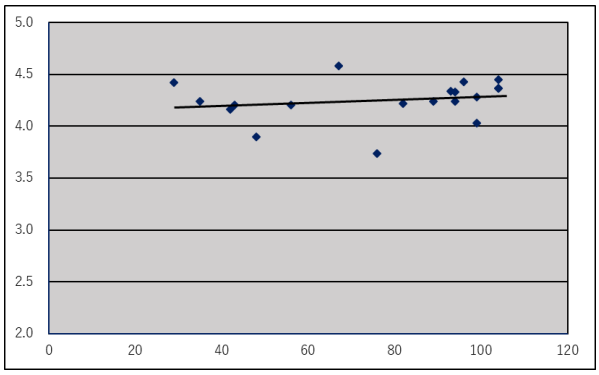

図 10　心理学科　履修者数（横軸）と授業評価点（縦軸）との相関
r ＝0.20　（n=19）

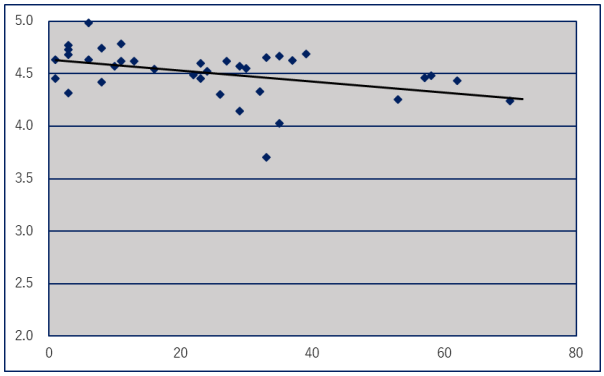

図 11　コミュニケーション学科　履修者数（横軸）と授業評価点（縦軸）との相関
r ＝-0.42　（n=36）

（６） 回収率

共通教養科目、共通語学科目および専門科目それぞれの授業評価アンケートの回収率を学科ごとに算出したものが図 12 である。それぞれの科目数は心理学科が 2、5、19 科目、コミュニケーション学科が 1、5、41 科目であった。回収率については、心理学科では専門科目の回収率 73.23%が最も高く、共通教養と共通語学が 55%程度であった。コミュニケーション学科では共通教養の回収率 79.17%が最も高く、専門科目が 71.70%、共通語学が 66.75%であった。

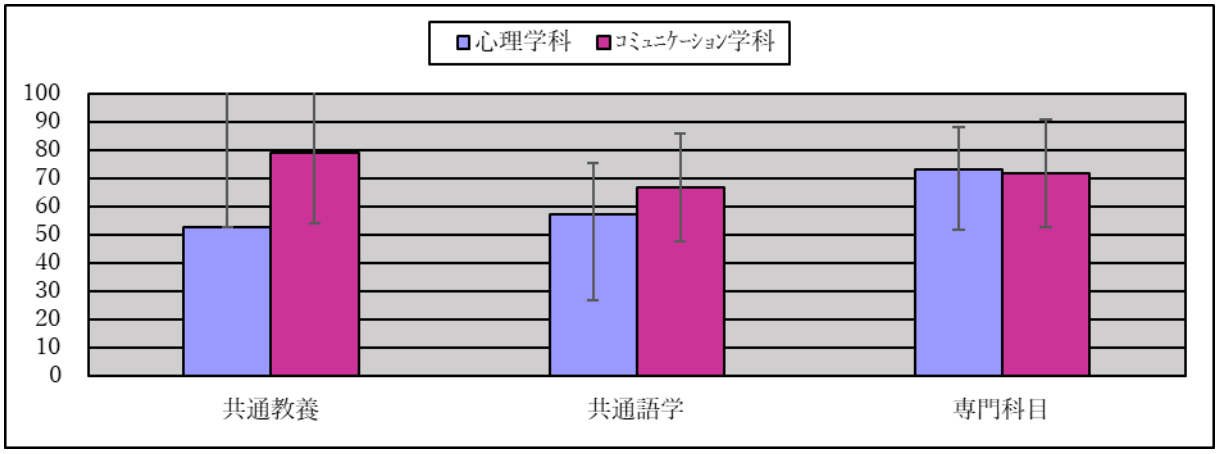

図 12　各科目の平均回収率（±SD）（%）
それぞれの科目数は、心理学科で 2、5、19 科目
コミュニケーション学科 1、5、41 科目

（８）学修時間と学修行動

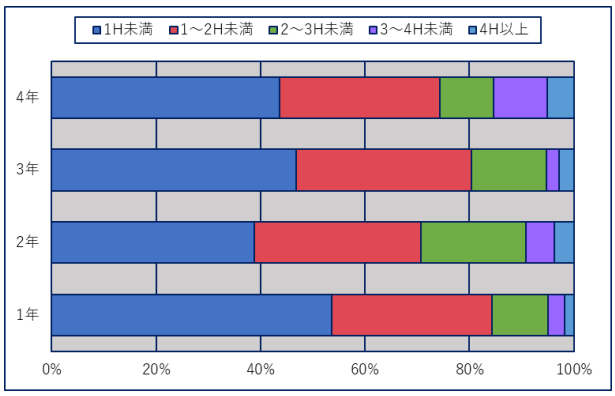

図 13　心理学科の授業外での学修時間

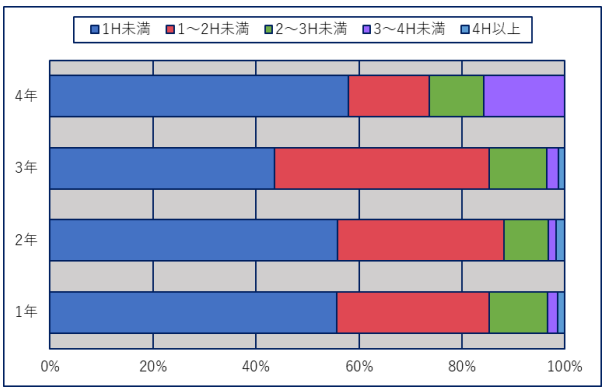

図 14　コミュニケーション学科の授業外での学修時間

各科目の授業時間以外での学修時間に関する項目について、学年別・学科ごとにまとめたものが図 13 および図 14 である。授業時間以外の学修時間とは、その授業に関する予習・復習に該当する。昨年度と比較すると、心理学科とコミュニケーション学科の両方で、4 年生の学習時間において 1h 未満の学生が昨年度を上回った。

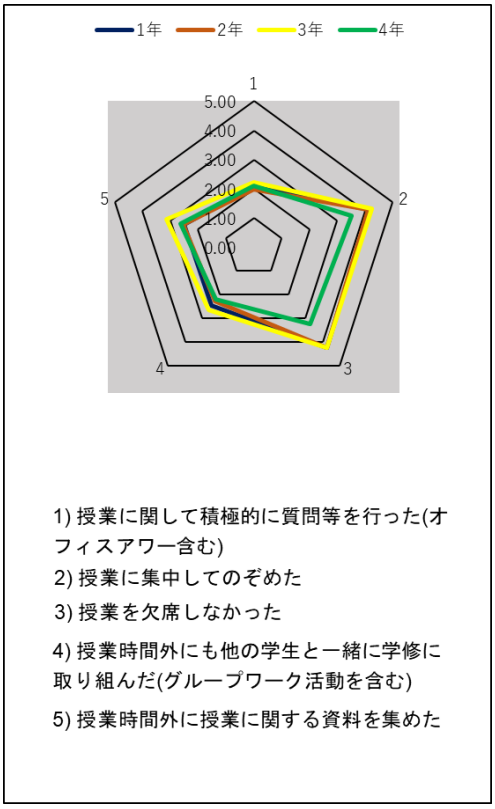

図 15　心理学科の学修行動

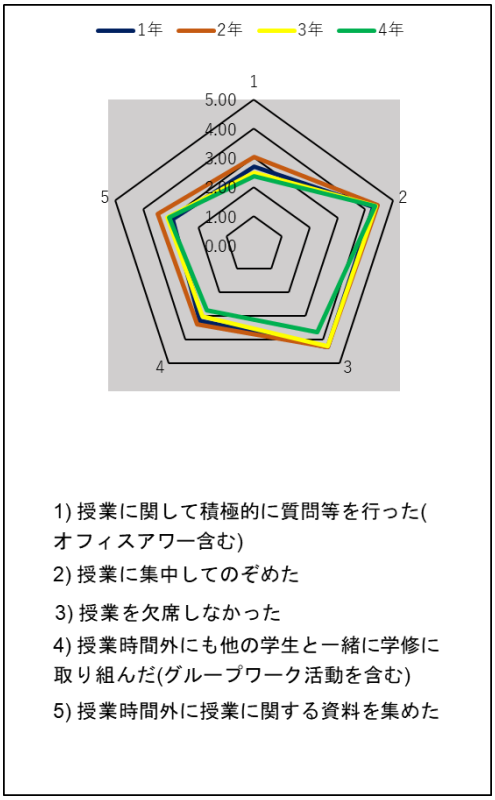

図 16　コミュニケーション学科の学修行動

続いて、各科目の学習行動における自己評価に関して、学科別にまとめたものが図 15 および図 16 である。昨年度と比較すると、いずれの項目についても、両学科とも昨年度とほぼ同様であり、大きな変化は見られなかった。

（報告：禿　寿）

令和４年度 後期末 人間生活学部

授業評価アンケート調査、学修時間等に関する報告

はじめに

本報告は、令和 4 年度後期に開講された科目の内、学生による授業評価が実施された 114 科目についてまとめたものである。分析の対象としたアンケート項目は、学科及び学年を問う 2 項目、授業及び学修に関する 17 項目（評価基準は 1～5 点）の計 19 項目で構成されている。内、授業及び学修に関する計 17 項目の設問を、以下の分類①～⑤の設問群にまとめ、各値を算出した。

設問群①：「授業内容」　4 項目の点数合計に対する 1 項目あたりの平均点
設問群②：「授業方法」　3 項目の点数合計に対する 1 項目あたりの平均点
設問群③：「総合評価」　4 項目の点数合計に対する 1 項目あたりの平均点
設　問④：「学修時間」　1 項目（1h 未満、2h 未満、3h 未満、4h 未満、4h 以上）の比
設問群⑤：「学修行動」　5 項目それぞれの平均点

これらを学科、学年、共通科目、専門科目などの観点から算出し、図示した。また、設問群①～③を「全体」として 11 項目の点数合計に対する 1 項目あたりの平均点も算出している。なお、他の代表値を用いることで検討できることもあると考えられるが今回は平均値を利用し、特に解析も実施していないため、あくまで結果の提示に留めることとする。経時的な理解のために昨年と比較する場合は、「令和 3 年度仁愛大学 FD 推進活動報告書」を御覧ください。

（1）共通教養科目

［健康栄養学科］

健康栄養学科学生が受講する共通教養科目（仏教関係、人間学関係、生活と環境関係、情報関係）において 11 科目から回答を得た（図 1 参照）。延べ回答人数は、1 年生が 220 名、2 年生が 48 名、3 年生 12 名、4 年生 1 名であった。4 年生は回答者が 10 名以下であったため、規定に従いグラフから除外した。1 年生、2 年生および 3 年生ともに、「授業内容」、「授業方法」、「総合評価」および「全体」の 4 項目すべてで 4.0 以上であった。

［子ども教育学科］

子ども教育学科学生が受講する共通教養科目（仏教関係、人間学関係、生活と環境関係、情報関係）において 11 科目から回答を得た（図 2 参照）。延べ回答人数は、1 年生が 142 名、2 年生が 43 名、3 年生 6 名、4 年生 1 名であった。回答者が 10 名以下だった 3 年生と 4 年生は、規定に従いグラフから除外した。

1 年生は「授業内容」、「授業方法」、「総合評価」、「全体」の全項目が 4.3 以上であった。2 年生も同様に全ての項目で 4.4 以上であった。

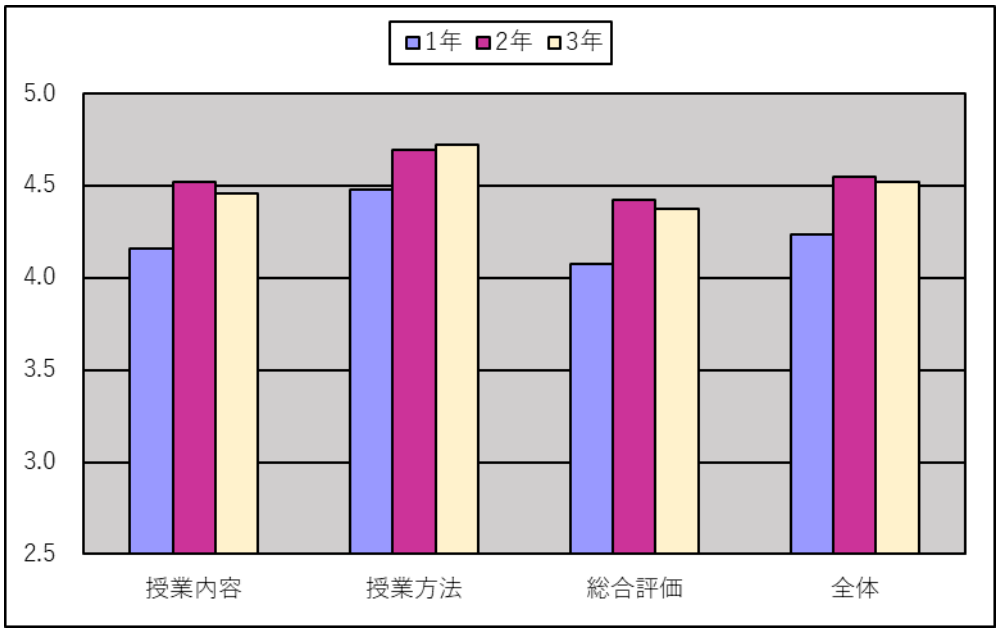

図１　健康栄養学科の共通教養科目に関する授業評価点
延べ人数　１年＝220 名、２年＝48 名、３年＝12 名

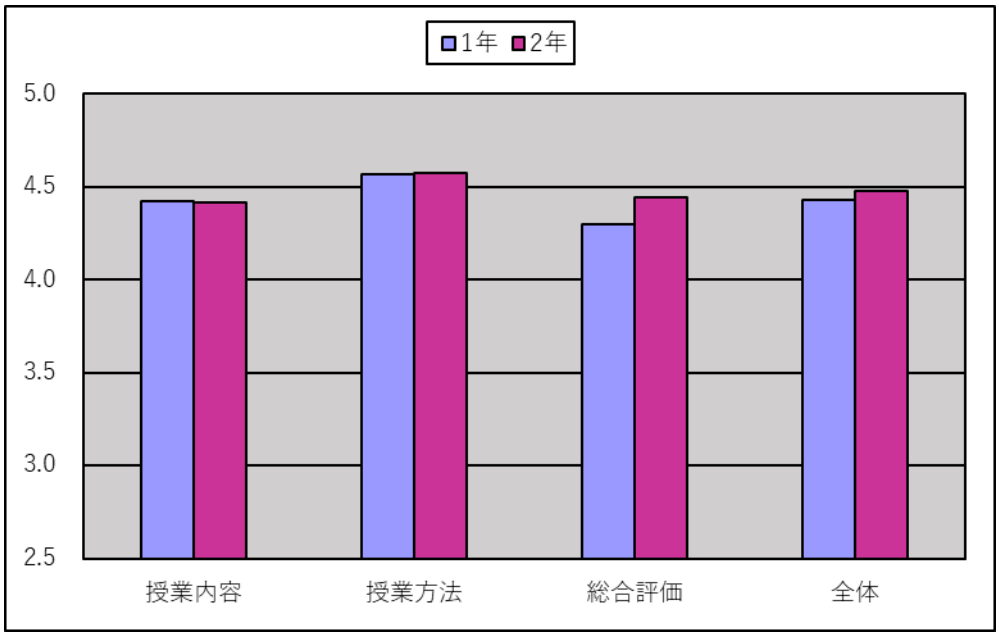

図２　子ども教育学科の共通教養科目に関する授業評価点
延べ人数　１年＝142 名、２年＝43 名

（２）共通語学科目

［健康栄養学科］

健康栄養学科学生が受講する共通語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ポルトガル語）において 7 科目から回答を得た（図３参照）。延べ回答人数は、1 年生が 92 名、2 年生が 14 名、3 年生が 2 名であった。回答者が 10 名以下の 3 年生はグラフから除外した。

1 年生と 2 年生ともに、「授業内容」、「授業方法」、「総合評価」、「全体」の全項目で 4.0 以上であった。

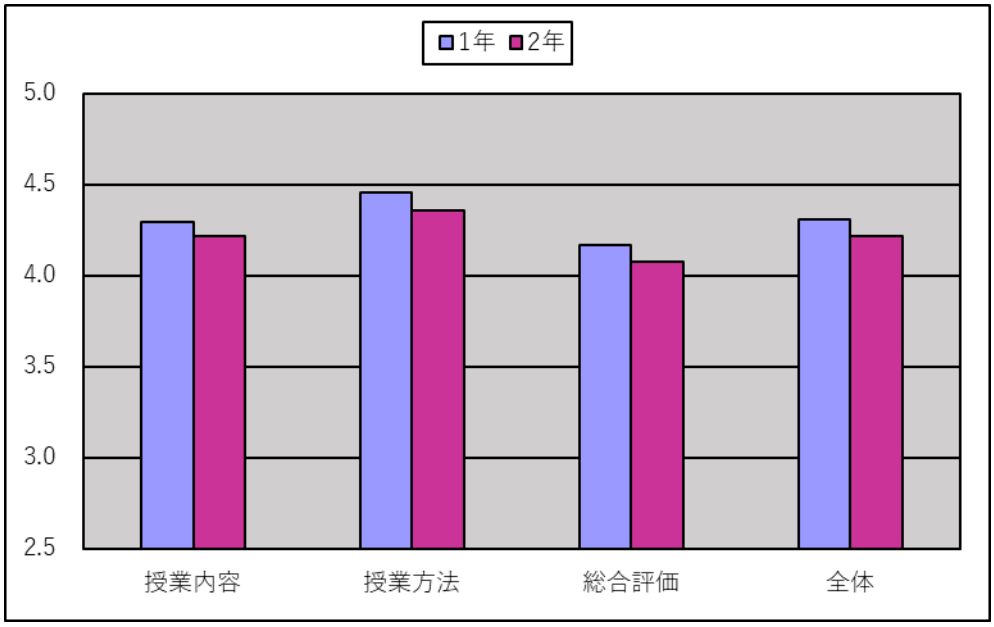

図３　健康栄養学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数　１年＝92 名、２年＝14 名

［子ども教育学科］

子ども教育学科学生が受講する共通語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ポルトガル語）において 7 科目から回答を得た（図 4 参照）。延べ回答人数は、1 年生が 68 名、2 年生が 4 名、3 年生が 3 名であった。回答者が 10 名以下の 2 年生と 3 年生はグラフから除外した。

1 年生では、「授業内容」、「授業方法」、「総合評価」、「全体」の全項目で 4.3 以上であった。

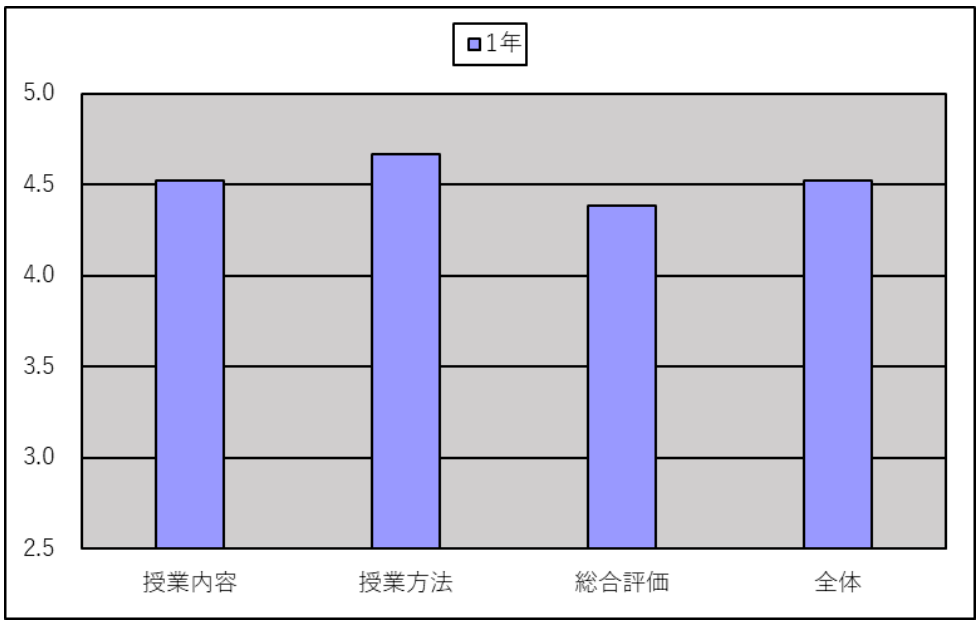

図４　子ども教育学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数　１年＝68 名

（3）専門科目

［健康栄養学科］

健康栄養学科学生が受講する専門科目において 44 科目から回答を得た（図 5 参照）。延べ回答人数は、1 年生が 406 名、2 年生が 365 名、3 年生が 282 名、4 年生が 27 名であった。1～4 年生の全学年において、全ての項目で 4.0 以上となり、ほぼすべての項目で令和 3 年度を上回る評価となった。

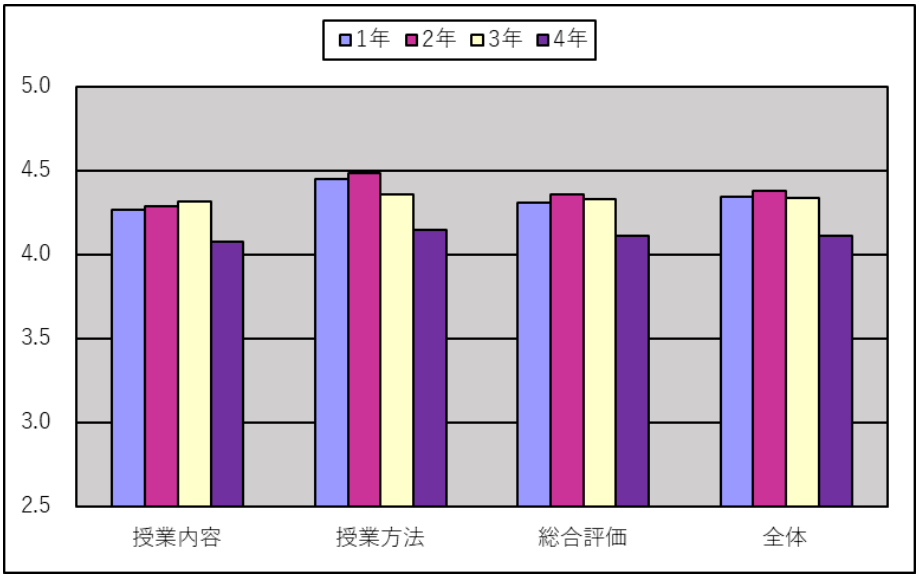

図 5　健康栄養学科の専門科目に関する授業評価点

延べ人数　1 年＝406 名、2 年＝365 名、3 年＝282 名、4 年=27 名

［子ども教育学科］

子ども教育学科学生が受講する専門科目において、47 科目から回答を得た（図 6）。述べ回答人数は、1 年生が 296 名、2 年生が 243 名、3 年生が 343 名、4 年生が 7 名であった。回答者が 10 名以下の 4 年生はグラフから除外した。1～3 年生において全ての項目で 4.1 以上であった。特に 1 年生では全項目 4.5 以上と高い評価となり、令和 3 年度を上回った。

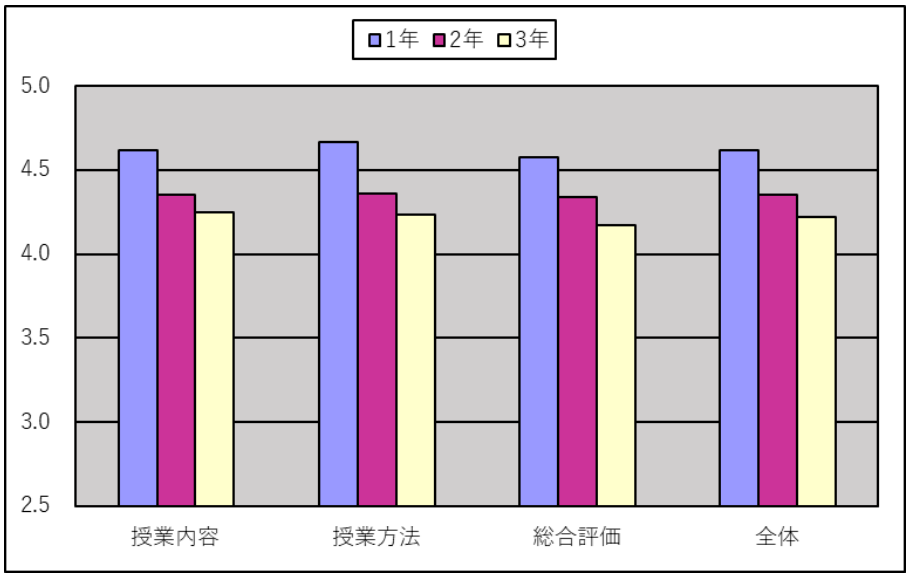

図 6　子ども教育学科の専門科目に関する授業評価点

延べ人数　1 年＝296 名、2 年＝243 名、3 年＝343 名、4 年=7 名

（4）科目の種類ごとによる比較

科目を以下の 3 つの観点から比較した。これらの観点は、授業に対する学生の意識の高さが授業評価の差異へ大きく影響すると考えられる。

・共通科目と専門科目

・必修科目と選択科目

・受講生が 40 名未満の科目と 40 名以上の科目

［共通科目と専門科目の比較］

図 7 は、共通科目と専門科目について対象学生を学科別に集計したものである。調査対象総科目数は 103 科目である。なお、学部共通科目 6 科目は両学科の学生がほぼ半数ずつ履修しているため、調査対象から除いている。

健康栄養学科では、共通科目の「授業内容」「授業方法」「総合評価」および「全体」の全項目で 4.1 以上、専門科目は全項目で 4.3 以上と概ね専門科目の方が高く、令和 3 年度と同様な傾向であった。

子ども教育学科では、共通科目は全設問の平均評価点が 4.4 以上、専門科目は 4.3 程度と概ね共通科目の方が高く、すべての設問で共通科目より専門科目の評価が高かった令和 3 年度とは逆の傾向になった。

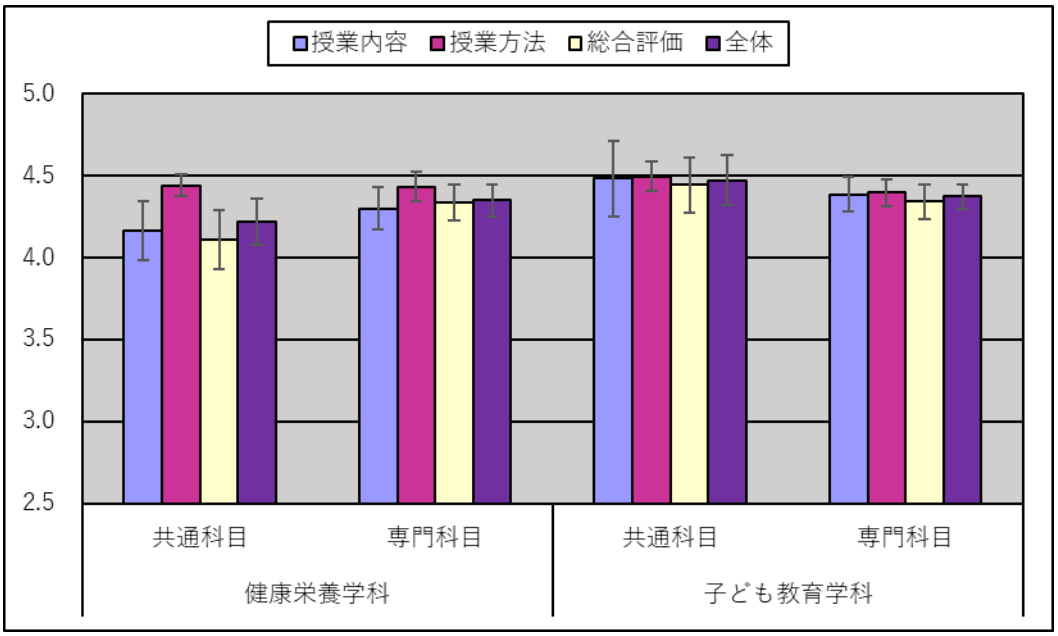

図 7　共通科目と専門科目別の平均授業評価点（±SD）
共通科目と専門科目数は、健康栄養学科で 6、44 科目、
子ども教育学科で 6、47 科目

［必修科目と選択科目の比較］

図 8 は、必修科目と選択科目について、対象学生を学科別に集計したものである。総科目数は 103 科目である。

健康栄養学科では、必修科目の各設問の平均評価点は概ね 4.3～4.5、選択科目の各設問の平均評価点は概ね 4.2～4.4 の範囲内になり、選択科目より必修科目の評価がやや高かった。

子ども教育学科では、必修科目の各設問の平均評価点は概ね 4.4～4.6、選択科目の各設問の平均評価点は概ね 4.3～4.4 の範囲内になり、選択科目より必修科目の評価が高かく、選択科目の評価がやや高かった令和 3 年度とは逆の傾向になった。

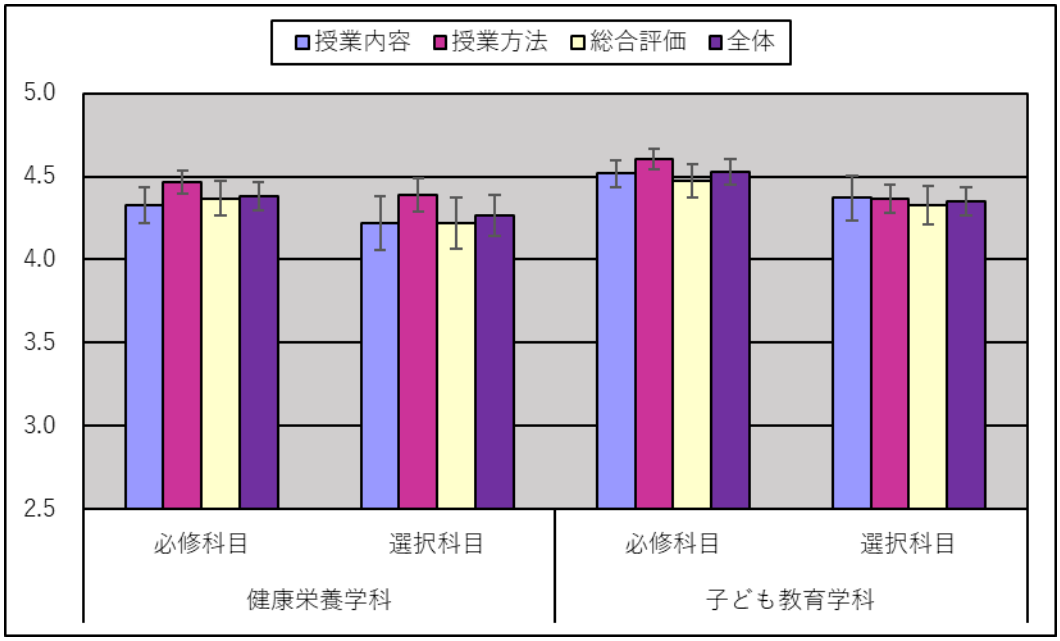

図８　必修科目と選択科目別の平均授業評価点（±SD）
必修科目と選択科目数は、健康栄養学科で 30、20 科目、
子ども教育学科で 10、43 科目

［受講生数による比較］

図 9 は、受講生が 40 名未満と以上で学科別に各項目について集計したものである。総科目数は 103 科目である。

健康栄養学科の各設問の平均評価点は、40 名未満の科目においてすべての項目で概ね 4.3～4.5、40 名以上の科目においては概ね 4.1～4.4 の範囲で、40 名未満の科目の方がやや高かった。

子ども教育学科の各設問の平均評価点は、40 名未満の科目においてすべての項目で概ね 4.3～4.4 の範囲、40 名以上の科目においては概ね 4.4～4.5 と、令和 3 年度の 4.1～4.2 から大きく増加していた。そのため、40 名未満の科目よりも 40 名以上の科目の方がやや高い傾向になった。

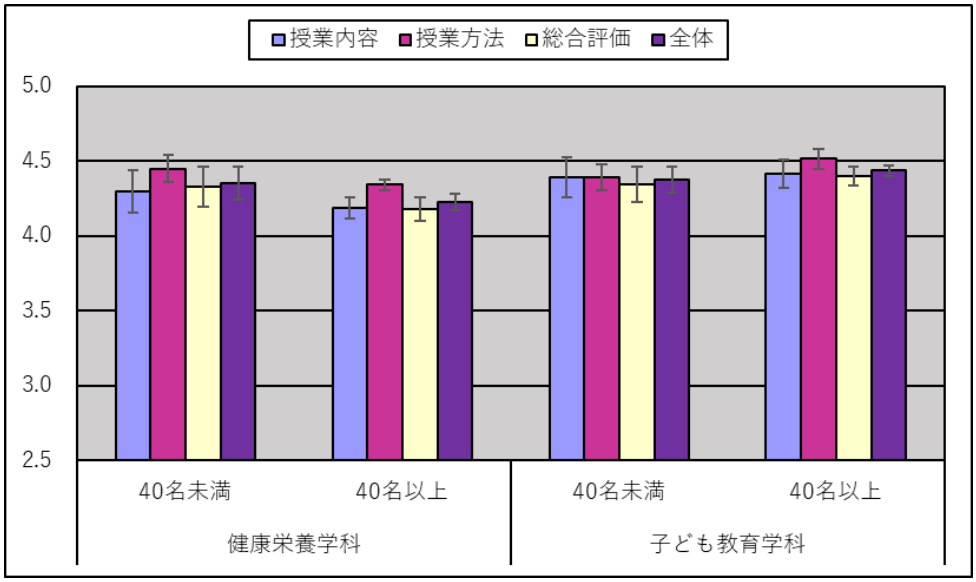

図９　受講生数による各科目の平均授業評価点（±SD）
40 名未満、40 名以上の科目数は、健康栄養学科で 43、7 科目、
子ども教育学科で 46、7 科目

［科目個々の受講者数と評価点との関係］

図 10～11 は、各学科での、受講者数と評価点との相関をみるために作成した散布図である。相関係数は、健康栄養学科では r＝－0.12、子ども教育学科では r＝－0.34 であった。両学科において、受講者数が多くなると授業評価点がやや下がる傾向が認められた。

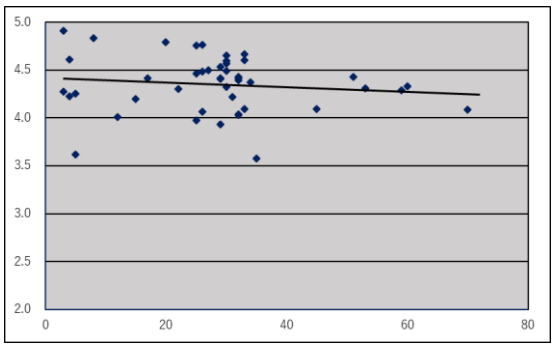

図１０　健康栄養学科
r ＝－0.13（n=45）

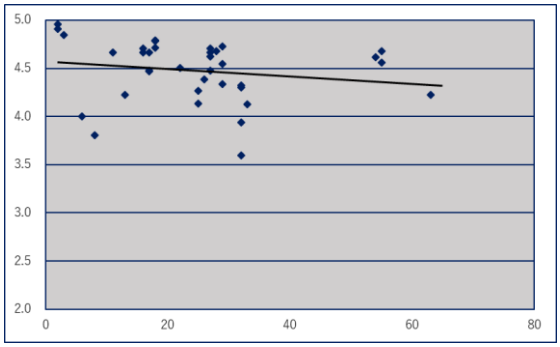

図１１　子ども教育学科
r ＝－0.18　（n=36）

［各科目の回収率］

共通教養科目、共通語学科目および専門科目における授業評価アンケート回収率の平均を学科ごとに算出した結果を図 12 に示した。それぞれの科目数は、健康栄養学科が 2、4 および 44 科目、子ども教育学科が 2、4 および 47 科目であった。それぞれ分類された科目種別における回収率の平均は、健康栄養学科では、共通教養科目が 95%、共通語学科目と専門科目で 85%前後であった。子ども教育学科では、共通教養科目と共通語学科目が 50%前後、専門科目で 70%程度であった。

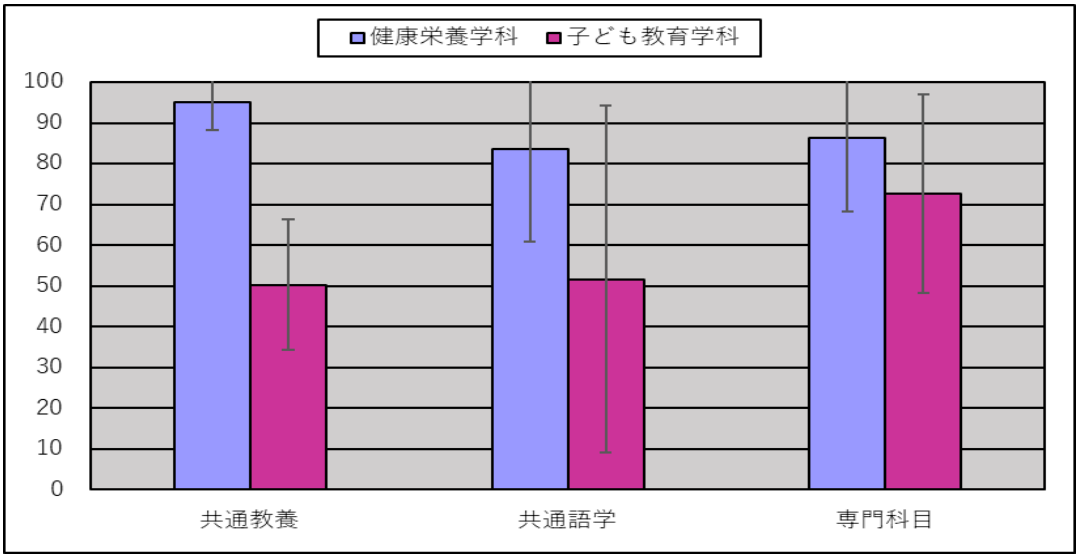

図１２　各科目の平均回収率（±SD）（%）
それぞれの科目数は、健康栄養学科で 2、4 および 44 科目、
子ども教育学科で 2、4 および 47 科目

（５）学外での学修時間

［健康栄養学科］

図 13 は、健康栄養学科における授業外での学修時間を集計したものである。延べ回答数は 1 年生が 719 件、2 年生が 427 件、3 年生が 296 件、4 年生が 28 件であった。授業外学修時間 1 時間未満の者は 1 年生で 50%程度、2 年生では 35%程度、3 年生で 20%程度と令和 3 年度と比較して約 5~10 ポイント減少したが、再履修者が多い 4 年生では逆に令和 3 年度の 7%から 17%程度に増加していた。一方、授業外で 2 時間以上学修している者は、学年が上がるにつれて増加し、3 年生では 55%以上に達していた。

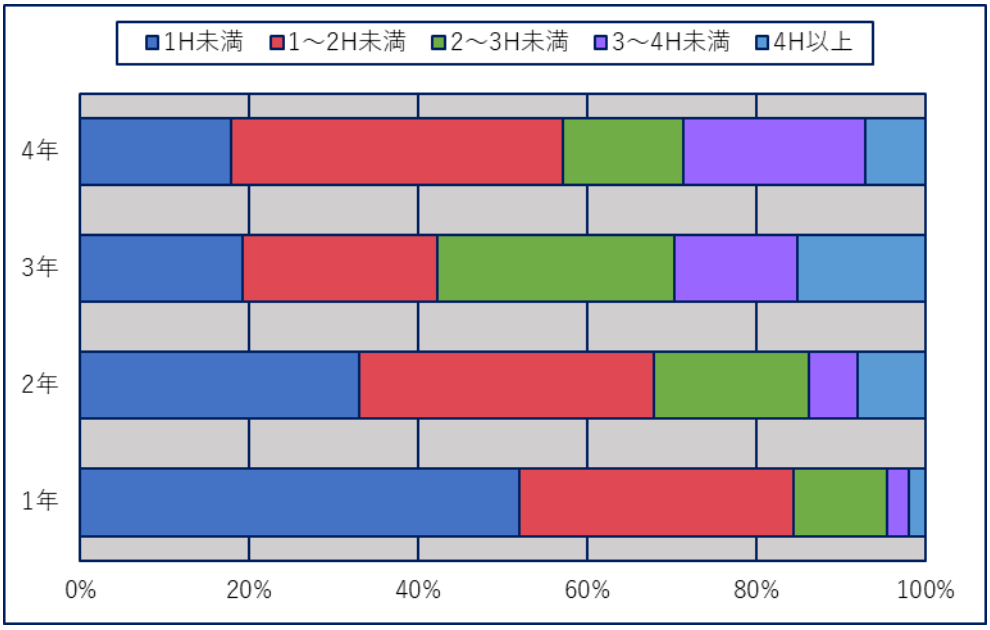

図１３　健康栄養学科の授業外での学修時間

［子ども教育学科］

図 14 は、子ども教育学科における授業外での学修時間を集計したものである。述べ回答数は、1 年生が 506 件、2 年生が 290 件、3 年生が 352 件、4 年生が 8 件であった。1 時間未満の比率が 1 年生で約 50%、2 年生で約 30%、3 年生で 55%程度、4 年生で約 65%程度と、令和 3 年度と比較して、2 年生で 10 ポイント減少していたが、それ以外の学年ではほぼ同程度であった。一方、授業外で 2 時間以上学修している者は、2 年生で 40%以上に達していたが、それ以外の学年では概ね 20%以下であった。

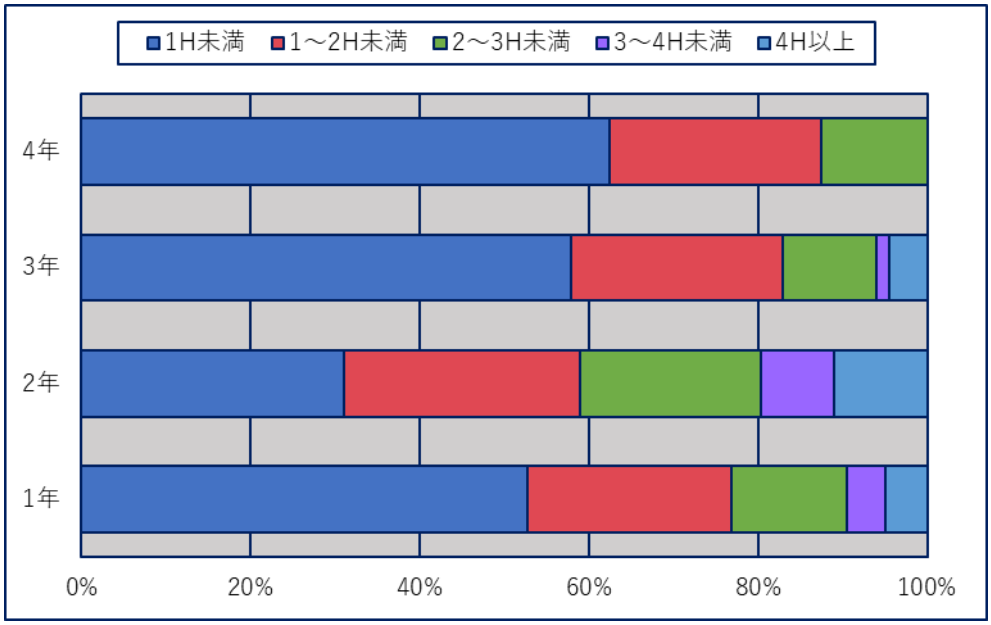

図１４　子ども教育学科の授業外での学修時間

（６）学修行動について

［健康栄養学科］

図 15 は、健康栄養学科での学修行動について比較したものである。「授業に集中してのぞめた」「授業を欠席しなかった」の設問は全学年 4.2 以上と高い評価だったが、「授業に関して積極的に質問等を行った」、「授業時間以外にも他の学生と一緒に学習に取り組んだ（グループワーク活動含む）」および「授業時間外に授業に関する資料を集めた」の設問は概ね 2.5～4.0 の範囲内で、学年が上がるにつれて増加する傾向が認められた。

［子ども教育学科］

図 16 は、子ども教育学科での学修行動について比較したものである。「授業に集中してのぞめた」「授業を欠席しなかった」の設問は全学年 4.1 以上と高い評価だったが、「授業に関して積極的に質問等を行った」、「授業時間以外にも他の学生と一緒に学習に取り組んだ（グループワーク活動含む）」および「授業時間外に授業に関する資料を集めた」の設問は概ね 2.5～3.5 の範囲内と低かった。全体的に 1～2 年生の平均評価点が高く、3～4 年生で下がる傾向が認められた。

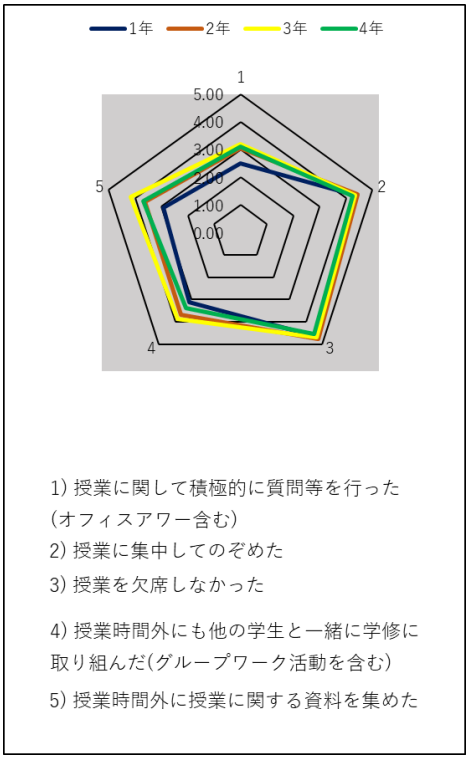

図１５　健康栄養学科の学修行動

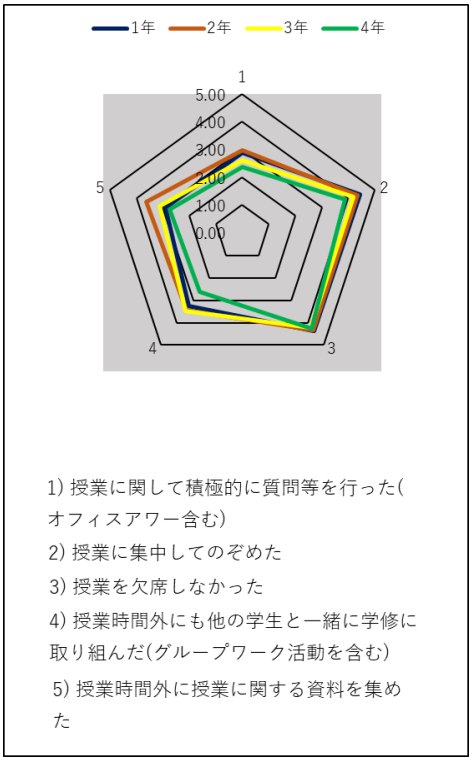

図１６　子ども教育学科の学修行動

（7）まとめ

令和４年度後期における人間生活学部の授業評価アンケート結果を様々な角度から集計し概観した。全体的な傾向として、「授業内容」「授業方法」および「総合評価」のどの設問も、昨年度の評価を 0.1～0.3 点程度上回る傾向が認められた。特に「授業方法」の平均評価は両学科ともどの学年でも 4.0 点以上で平均評価が 4.5 点を超えている学年もあり、この数年間の各教員の授業改善への努力が成果となって学生の満足度に反映されつつあるもと推察されるものの、やや頭打ち感があることは否めない。一方、「授業内容」については、両学科ともに国家資格養成課程のコアカリキュラムやシラバスの都合上、必ずしも学生の興味だけに沿えるわけではないこともあり、「授業方法」より概ね低い評価で推移している。

遠隔授業から対面授業に回帰したことにより減少傾向だった昨年度（令和 3 年度）後期の授業時間外学修の平均時間は、健康栄養学科ではやや増加傾向に持ち直したが、子ども教育学科ではほぼ同等の平均時間で推移していた。健康栄養学科では、4 年次末の管理栄養士国家試験にむけて学年が上がるにつれ学修時間が増加する傾向があるが、今年度の 4 年生（2019 年度入学：11 期生）は、3 年次（2021 年度）から 4 年次（2022 年度）にかけて学修量の増加は認められず、2 時間以上学修している学生が約 40%のまま推移しており、2 時間以上学修している学生が約 60%だった 3 年生（2020 年度入学：12 期生）よりも学修時間が少なかった。この 4 年生の学習量の少なさが、今年度の国家試験辞退率や国家試験合格率にどの程度影響を及ぼしたか追跡して分析する必要がある。一方、子ども教育学科では、2 年次の学修時間が最も多く、2 時間以上学修している学生が約 40%を占めるが、シニアグレードの 3～4 年生になると 20%以下に激減している。この傾向は昨年度から同様であり、1 年次および 3～4 年次開講科目では授業時間外の課題について再検討する余地があると思われる。

また、学修行動では、「授業に関して積極的に質問等を行った」が健康栄養学科で 2.5～3.2、こども教育学科で 2.3～3.0 とすべての学年で低いが、学年ごとの傾向は学修時間と相関している。すなわち、授業に関する資料を集めることも含め授業時間外の学修時間が多い学年ほど、積極的に質問もしている傾向が認められる。以上の分析から、人間生活学部においては、授業時間外に取り組ませる課題の設定方法にさらなる改善の余地が残されているのではないかと考えられた。

今後もこのような調査を継続して実施し、学科や学年毎の特性に関する分析結果を教員間で共有することは重要である。ただし、これらの評価指標は学生の主観に基づく顧客満足度であり、授業改善の本質的成果指標である学力向上については客観的な成績データ等も含めて総合的に評価していく必要がある。チャット GPT 等の AI 技術を手軽に扱えるようになり、学生を取り巻く近時の学修環境の進化は著しい。新しい IT 技術に適応しうる学修課題を創意工夫し、その試行錯誤の中から真に有効な教授手法を見極めて、より早く授業にフィードバックさせていくことが今後さらに求められるようになってくると思われる。

（報告：野村　卓正）